

術靈の壽長病無

自由に自分の胃を洗ひ
便通を來すを得

新療法

方法に至て容易
子供にも出來ます

陸軍軍醫
黒川與三郎著

258
698

058697-000-6

特25-84

新療法

黒川 与三郎/著

M41

CBC-0240





著者 黒川 三郎 氏 肖像

新療法

第一緒言

生くるを喜び死ぬるを嫌ふは生けるもの通有の情にて。疾病をに
み健康を愛するは人情の常なるべし。世に若し病ひを避け得る妙
を賣る者あらば一包の價萬金にても人其の廉なるを悦ぶべく。死を
免るゝ靈術を説く者あらば生ける人は争つて皆其門を訪ふなるべし。
然るに悲哉世に不老不死の妙術なく無病保険の靈藥もあることなし。
唯々余が今回發見の新療法は狭き意義に於て無病長壽の術と云ふも
可ならんか。請ふ其理由を左に説かん。夫れ五尺の體の營養材料を
造るものは胃なるが故に胃の作用弱ければ全身至る所營養不良に陥
りて諸種の疾病に犯され易きは見易きの道理なり。去ればこそ諺に
も胃病は萬病の本なりとこそ云ふなれ。然るに此新療法は胃の力を

強からしむるが故に消化よろしく食すし、毛のうら爪のさき迄も滋養の液が溢れんばかりに充ちて、骨筋内臓の區別なく、營養益々佳良に進み、其活力其機能愈々活潑に赴くべきは鏡をかけて見る如し。斯の如くんば、牙を鳴らし眼をはりて、四面より窺ひ居る病魔の乗すべき隙なきのみならず、既に入込みて久しきを経たる其れも、生存競争に敗北して逃げ去るの外あるべからず。嗚呼無病の法長命の術よ。

第二 本療法の意義

本療法は余の工夫せる壓抵器を左右の乳頭部に壓抵して、間接に、迷走神経及副神経を刺戟し、胃腸の運動を起すものなり。

第三 發見の由來

明治三十一年の春なりき。余が修業のために都へ出て、淀橋附近に居りし時。余の宿痾たる腦神経衰弱症が聊か重りて毎夜の如くに眠

るを得ず。如何に工夫しても眠り得ず。眠りの不足は大に健康を害するが故に、或夜のこと今宵こそは必ず一睡にありつかんと、數町の歩行を試みて顔を洗ひ手足をすゝぎて心靜に臥したりしに、依然として眠るを得ず。夜は益々更け行くに心は愈々明かにて、少しも眠氣を催さず。余は閉口して、尙數十分間思案に思案を重ねし末に心を一方に集むる方便として、頭部の皮膚もて力任せに、頭蓋に壓迫を加へ居りしに、數分間にて眠るを得たり。幸ひにして眠るを得たり。爾來余は此方法を唯一の催眠術と心得不眠を患ふる毎に試み來りしに、明治三十六年頃頭部に力を入ると同時に腹鳴を發すること、心つき催眠の方法以外に屢々之を試みたれど、未だ深く留意するには至らざりき。然るに明治四十年余が千葉縣千葉町在住の頃は、此方法の偉大なる効果を奏することを認めたり。前にも云ひたる如く、余は二十五年以來胃弱兼腦神経衰弱症にて、年が年中鬱々憂々芝居を見ても面白からず、花見に行きても氣が浮き立たず、二十五年一日の如く苦しみ月日を送

りたりしに今や意外此方法を行へば其日は快活を覺えて否らざる日は再び鬱憂に陥いることを知り得たり。余は喜びて連日之を行ふに連日爽快にて些の鬱憂を感ずることなし。是に於て余は其理由を説明せんと思ひ立ち大に考慮を費せり。想ふに腹鳴を發して爽快を感ずるは胃腸の蠕動に因らざる可らず。即ち胃内容物の自躰中毒を除き得たる結果ならざるべからず。胃腸の蠕動を起すものは迷走神経ならざるべからず。迷走神経を刺戟すべき壓力は頭蓋の内面に及ばざる可らず。然るに頭部外皮の壓力が如何にして頭蓋内面に達すべきや或は現今未知の理由ありて腦膜の動くものにあらぬかとの疑ひにて是が解決を得んために兩掌もて頭皮を固定し然る後に例の如く頭部に壓迫を加へ見るに毫も効果を認むることなし。乃ち該壓力の及ぶ處の頭蓋の外面に止まることを明らめたれど其外面の壓力が如何にして迷走神経を刺戟し得べきや是れ頗る至難の問題たり。余は解剖圖を披見すること數回解剖書を讀過すること又數回而して著大

なる乳頭部の導血管に注目するに及んで彼の頭部に力を加ふる際に前額部の筋肉收縮して帽狀腱膜及頭部後方の軟部を前上方に牽引して此導水管口を閉塞し横竇内に鬱血せしめ頸靜脈を怒張せしめ從て同靜脈と共に頸靜脈孔を出る所の迷走神経及副神経を同孔に於て刺戟し以て胃腸の蠕動を起すものならんと想像せり。依て試みに適當なる器械を造りて該導血管口を壓迫するに腹鳴を發して爽快を感ずること以前よりも顯著なり。余は益々之を確めんと思ひて次の試験を施行せり。

第四 此方法の脈數及呼吸數に及す

影響の試験

明治四十年十二月五日千葉縣千葉町北道場の寓居に於て左の試験を施行せり。被験者は現今健康なる者なり。時正に午前三時四邊寂として物音なく天井裏にて二三の鼠が逐ひつ

逐はれつ悲鳴を擧ぐる聲のみ聞えたり。余は快く寝入りたる一人を揺動かして目を覺させ、仰向きに静臥せるまゝ其脈數を検するに、初めの一分間には五十八至にて、其次の一分間にも、又其次の一分間にも、同一なりき。乃ち被験者をして兩上肢を肩と水平に側方へ伸展せしめ、掌を開きて掌面を上に向け、肘を銳角に屈して兩手を頭と枕との間に入れしめ、豫て用意の壓抵器を乳頭部と掌面との間に挟み、頭の重さにて同部の導水管を壓閉せしめて二十秒時を経たる後に、靜に其脈數を検するに、初めの一分間には五十五至にて、其次の一分間にも、又其次の一分間にも同一なりき。是に於て該壓抵器を去りて以前の姿勢に復せしめ、然る後に其脈數を算するに、初めの一分間には五十八至にて、其次の一分間にも、又其次の一分間にも同一なりき。他の二人も同一の方法にて試験せり。表して左に示す。

呼吸數も同一の方法にて試験せり。表して左に示す。

第五 動物試験

時間	件名	管乳頭部直前血	管乳頭部直中血	管乳頭部直後血	年姓
一分時	脈搏	五十八至	五十五至	五十八至	女性 當三十五年 某
三分時	呼吸	五十二回	四十八回	五十二回	
一分時	脈搏	六十二至	五十九至	六十二至	
三分時	呼吸	三十一回	二十九回	三十一回	男性 當四十一年 某
一分時	脈搏	七十三至	七十至	七十三至	
三分時	呼吸	五十四回	五十回	五十四回	女性 當二十四年 某

明治四十年十二月十日、千葉縣千葉町北道場の寓居に於て左の試験を施行せり。野兎頭部の解剖を検するに、迷走神經及副神經の内頸靜脈と共に頭蓋を出ること、人軀に同じく、又導血管ありて、横竇内の血液を外面の靜脈に導くことも、人軀に等しきが故に、野兎につきて試験せり。一頭の野兎を手術臺に載せて仰臥位に固定し、腹部の毛を剃り、石鹼にて洗ひ、酒精にて消毒し、仰ぎ見れば、柱上の時辰儀正に午後一時を

示せり。乃ち刀を執り胸骨下端の下一仙迷突の部より下方に向ひて長さ六仙迷突正中線に於て層を逐ひて腹壁を切開し胃の一部を露出すれば胃は恰も静止の状態にあり。是に於て自ら野兎の頭部へ手をかけ豫め造り置きたる壓抵器を左右の耳後に壓抵すれば十五秒時にして胃は蠕動を始め尙五秒時にして活潑の極度に達せり。尙耳後の壓迫を持續しつつ胃の動靜を伺ふに其蠕動に變化を示さず。斯くすること三分時にして該壓迫を除去すれば胃の蠕動は尙十分間持續して然る後に停止せり。乃ち創口を縫合し繃帶して試験を終れり。時に午後一時三十分なりき。

此試験を行ふこと前後十回野兎を用ゐること都合十頭而して皆殆ど同一の成績を示せり。唯耳後の壓迫を去りてより胃の蠕動停止するまでの時間に長短の差ありしのみ。去れど壓迫除去後の蠕動持續は他の原因によるものなるべし。

第六 解剖生理的説明

此方法は左右の乳頭部を壓迫して同部の導血管を閉塞するものなり。乳頭部の導血管は横竇の血液を後頭靜脈に導くものなるが故に該導血管を閉塞すれば横竇の血量増多せざるを得ず。横竇の血量増多すれば其下流たる内頸靜脈の血壓亢進せざるを得ず。内頸靜脈の血壓亢進して其壁を怒張せしむれば同靜脈と同伴して頭蓋を出るところの迷走神經及副神經を頸靜脈孔に於て刺戟せざるを得ず。而して副神經は其前枝を迷走神經の節狀叢に移行せしめて是に運動纖維を與へ又迷走神經は胃腸の蠕動を起すべき生理作用を有するが故に此二神經興奮すれば胃腸の蠕動を起すべきは見易きの道理なり。

第七 旅行の方法

一器械

器械は余が工夫せる壓抵器一個にて足れり。

二用法

前記の壓抵器を左右の乳頭部に壓抵すれば可なり。

三壓抵器の壓抵時間

導血管を閉塞すれば頭蓋内に鬱血を來すべき道理なるが故に度を越えて長時間に亘る可らず。四十歳以上の人は殊に注意せざるべからず。

一回の壓抵時間は約二十秒乃至三十秒即ち五回乃至十回呼吸する間に足れり。先づ器械を壓抵し、五回乃至十回呼吸し終らば直に之を去るを可とす。

尤も余は三四分間持續して壓抵して見たるに頭痛も耳鳴も起さざりしが故に深く心配するには及ばざるなり。

四壓抵法施行の回数及時刻

イ時刻は何時にても可なり。

ロ消化せる胃の内容物を腸に送らん目的には食後三四時間のあひだ毎一時に一二回づゝ行へば可なり。

ハ胃を洗ふ目的には食直前即ち前回の食事より五六時間を経たる時に約一合の煮沸水を頓服し、右を下に側臥位となりて五分乃至十分間前記の壓抵法を繰返して行ふべし。再言すれば先づ器械を壓抵し、十回呼吸する時間を経て之を去り。更に十回呼吸する時間を隔て、再び器械を壓抵し、又十回呼吸する時間を経て之を去り。尙更に十回呼吸する時間を隔て、三回目の壓抵を行ひ、尙又十回呼吸する時間を経て之を去り。斯の如く反復して五回乃至十回行へば可なり。

ニ大便の通利を得んがためには前項の胃を洗ふ方法の如く朝食前に約一合の煮沸水を飲んで先づ右側臥にて五回次に左側臥にて十回反復すべし。其れにて尙便意を來さずんば食後に左側臥にて數回を試む可し。

ホ之を要するに適度に行ふを肝要とす。身体の容態に従ひて加減せざるべからず。胃内容物の自體中毒を避けんがためには、一日に三回食前に行へば足るべきを信ず。

第八 本療法の効果

一、胃病

思ふまゝに胃を洗ひ得るが故に速に治癒すべし。但血を吐く症即ち胃潰瘍には用ゆ可らず。

二、便秘

思ふまゝに腸を動かし得るが故に何時にても便通を得べし。

三、脳神経衰弱症

此症に罹りて胃の運動不充分なる者は胃の内容物が醗酵して有害物を生じ、其有害物が吸収せられて、脳神経を害するものなるが故に、此療法にて胃の運動を活潑ならしれば治癒すること速なり。

四、肺結核

此病に罹れる者は肺の結核菌に打勝つたけに、體力を強むるを第一の療法となすものなるが、此療法を行へば消化よろしく食すゝみて、全身の營養を増進せしむるが故に、比較的速に治癒するなり。

五、坐業の人

平素之を行へば食物胃中に停滞することなきが故に、胃病に罹ること稀なり。

六、過度に精神を勞する人

平素之を行へば胃内容物の身軀中毒を起すことなきが故に、脳神経衰弱症に陥ること稀なり。

七、美食

美味の食を望む者は、此療法を試み給へ。胃中一物も存せぬが故に、如何なる粗飯も口に叶ひて殆んど副食物を要することなし。

八、美酒

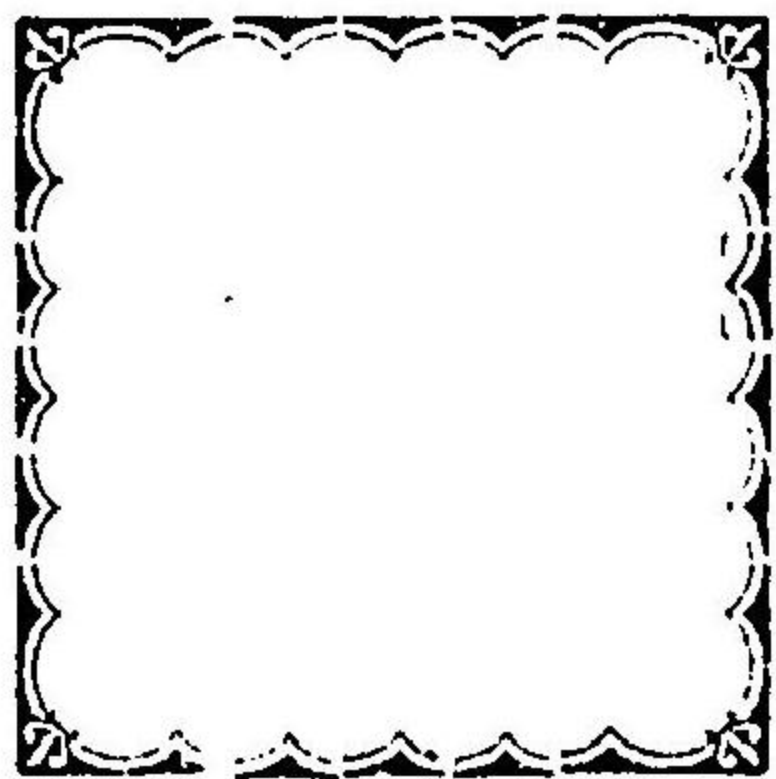
美酒を得んと欲する者は、此療法を試み給へ。胃内眞に空なるが故に、二合の所を五勺に酔いて、其心地頗るよろし。

九夜中不眠を患ふる者は、此療法を試み給へ。覺めず夢みず至つて穩に眠るを得べし。

十、以上列擧せる如くなるが故に、此療法にて、胃は益々壯健にて、全身の營養材料は餘りあるも不足なく。肺は愈々強壯にて、結核菌の入ることあるも容易に之を滅殺し。心臓は益々健全にて、胃の造れる營養液を遲滯なく全身に送達せんこと明かなり。斯の如くんば、多病短命ならんと欲するも得べからざるなり。

明治四十一年八月一日印刷

明治四十一年八月四日發行



著者兼
發行者

黑川與三郎

茨城縣結城郡山川村大字芳賀崎
三百八拾五番地

印刷者

小松操

東京京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京京橋區西紺屋町廿六七番地

2N-99

廣 告

特許
出願中
黒川 壓 抵 器

右は黒川氏の發明せる輕便なる器械
にて同氏の新療法に欠く可らざるも
のなり

